

二〇一八年八月三十一日

台風之余波か干し物踊り出す  
農道の一直線や豊の秋  
合掌す苔むす陸墓秋の声  
鉦叩きリズム正しく夜の更くる

はく子  
こすもす  
ぼんこ  
宏 虎

二〇一八年八月三〇日

児の引きし当たりくじなる大西瓜  
ト口箱に秋刀魚右向き左向き  
初秋刀魚食べ甲斐のある太さかな  
降り立てば虫浄土なる終電車

治 男  
よう子  
あさこ  
智恵子

二〇一八年八月二十九日

葛の蔓迫る過疎地の廃線路  
やうやくに取れしギブスや秋高し  
解体てふ湯屋の煙突秋の空  
食卓に散歩に摘みし草の花  
立ち話佳境なれども夕立雲

よし女  
やよい  
はく子  
はく子  
こすもす

二〇一八年八月二十八日

初秋刀魚骨のみ残す喰いつぶり  
豊の秋軽トラ集ふ道の駅  
ふるさとに今も味噌部屋昼の虫  
奥入瀬の水が水切る飛瀑かな  
夏枯の鉢物矢尽き刀折れ  
髪型を変へて新涼覚えけり  
伊吹嶺に立てば四方より秋の声

もとこ  
よう子  
菜々々  
愛 正  
明日香  
こすもす  
せいじ

二〇一八年八月二十七日

牛小屋のありしあたりや蓼の花  
ゆりかごや稲の穂先の赤とんぼ  
風鈴の思ひ出したるごと鳴りぬ  
八千草を備前の壺に老舗宿

はく子  
ぼんこ  
せいじ  
たか子

二〇一八年八月二十六日

処暑の風土間吹き抜くる其中庵  
月光に葎の波の濡れにけり  
枕辺に手花火置いて昼寝の子

三 刀  
もとこ  
なつき

二〇一八年八月二十五日

旋風に負けず稲穂の立直る  
終ひ湯の窓を開ければ秋の声  
秋草の名を聞き合うて万葉園

明日香  
満 天  
たか子

毎日句会みのる選・二〇一八年九月二日